

《名画の扉》

大川美術館企画展 生誕130年記念
「曾宮一念展—空にけやぎをゆるす風」から

1963年70歳にして海路を選びました。左目の視力もあと10年と宣告されていた曾宮一念。本作を描く頃には視野も次第に狭くなり、スケッチブックが見えにくくなっていったものの、色彩はまだまだよく見えていたといえます。子供の頃から夕日が好き、一時は夕方の景色以外描かない時期もあったという曾宮。落日の風景は、曾宮が終生向き合い続けたモチーフでした。67年10月、海上から朝日や夕日を見たいという理由から、欧州旅行に出発します。往路にはあえ

1963年70歳にして海路を選びました。「午後四時ごろ夕日が見える甲板に立ってスケッチブックに描きました。スケッチといっても鉛筆で陽を丸く描くだけです。多少の雲がありますとそれも描いて。海は絵のほうとしてはもの足りないくらい静かでした」

本作はこの時に描かれた一枚でしょう。刻々と移ろう海景の瞬間を逃すまいと描く曾宮の高揚感が伝わってきます。(小此木)

※曾宮一念展および同時開催「松本竣介のアトリエ再見展示」は、11日(日)まで。

「洋上夕日」

1967(昭和42)年
水彩、鉛筆・紙 17・0cm×24・3cm



曾宮一念 (1893~1994年)